

令和5年度  
国  
語

(解答用紙は別紙としてこの冊子にはさんであります。)

## 【1】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

聴くといえば、誰もが恐らく、耳で、と答えるだろう。聴覚は鼓膜に伝わる空気<sup>a</sup>のシンドウを聴覚神経が脳に伝えて……と、昔、学校で習った記憶がある。A、聴くという行為が、耳でする、ただ単に音響情報を受け取るという受動的な行為だとともに信じられない。

例えば、数名が同じ部屋にいても同じ音を聴いているとは限らない。どこからともなく響いてくるBGMを聴いている人もいれば、作文しているワープロのキーを打つ音に神経を集中している人や部屋の外の鳥の鳴き声に耳を澄まして<sup>b</sup>いる人もいる。後者の人たちにはBGMの音はほとんど聞こえていない。走る電車の中においても、隣の人と話していると、あるいは本を読んでいると、その轟音はほとんど耳に入っていない。聴くというのは、こちら側からの選択行為でもあるのだ。

人の話を聴くというのは、それ以外に聴くものがないようにみえるが、実はもっと選択的な行為である。相手が親しい人なら、きちんとその言葉を受け止めていないと、「ちゃんと聴いてるの?」「聴く気はあるの?」と問い詰めてくる。

「愛さないと見えないものがある。」と言った哲学者がいる。「愛が認識をキソづける。」という言い方で。「愛さないと」という言い方がちょっと重すぎるとすれば、「相手に関心がない」と言い換えてもよい。【 I 】  
聴かれるほうからすれば、相手に関心があるのかどうかは、その聴き方ですぐに分かるものである。B、こちらの聴き方次第で、愛されていると感じたり、自分のことなんかこの人にとってはどうでもいいのだと感じたりもする。正確に、そして繊細に。だからこそ、対話においてはしばしば、語るほうが先に傷つくのである。逆の言い方をする、聴くということが選択的な行為である限り、それは何かを選んで聴くということであって、相手が伝えたいことをそっくりそのまま受け取るというのは、なかなか難しいものだ。そしてそこに自分が出る。何を聴くかというところに。

聴くというのは、相手の言葉をきちんと受け止めることである。理解できるかできないかは、普通思われているほど重要ではない。それより、話すほうが「分かってもらえた。」「言葉を受け止めてもらえた。」と感じることが重要である。C、自分について話すことは、自分を無防備にすることだからだ。逆に言えば、何でも話せるというのは、相手に自分が、今のままでも十分に、そして（もしあなたがこうしてくれるなら、といった）条件付きではない。

く、そのまま受け入れられていると感じることだからである。「分かってもらえる。」というのは、苦しみを「分かち持つてもらえる。」ということでもあるのだ。ちなみに、西欧の言葉でシンパシー<sup>1</sup>というのは「苦しみを分かち持つ。」という意味だ。【 II 】

聴くことの力というのもそこにある。昔ある新聞で人生相談をしていた宇野千代さんが、いつも「あなたは……だと言うのですね。」というフレーズを連発して、相談を持ちかける人の言葉をほとんどそのまま反復するだけの「相談」をしていたが、その効果もそこにある。相手の苦しみをそれと認め、受け入れることは、それに同意することでも同感することでもない。心を一つにするのでも、理解できるというのでもなく、言葉をそのまま受け止めるということそのことに意味がある。聴くだけというX、な行為がケアにおいては最も深い力を持ちうるのも、そういうわけである。

心のケアやカウンセリングにおいて、慰めの言葉や助言よりも、「こうなんです。」と繰り返して確認することが大きな意味を持つのは、恐らく、そういう語りの中で語る人自身が、自らを整えるような「物語」を紡ぎだしていくことになるからである。

聴くというのは相手の鏡になろうとすることもある。その意味で、他者のケアとは、他者のセルフ・ケアをケアすることでもある。

語る人は聴く人を求めている。語ることで傷つくことがあるとしても、それでも自らをY、なまま差し出すことである。ケアにおいてそのリスクに応えうるのは、「関心を持たずにいられない。」という聴く側の気持ちであろう。「大丈夫ですか?」「何かお手伝いできることはありませんか?」。そういう関心が貫いて初めて、人は他人を聴くということが可能になるのである。【 III 】

とはいうものの、本当に苦しいことについて人は話しくいものだ。なかなか話したくないものだ。忘れてしまいたいということもある。どのように語っても追いつかないという想いもあるだろう。だから、そこから漏れてくる言葉は、ぶつつ、ぶつつと途切れている。誰に向けられるでもなく、ぼろっところぼろっだけ。【 IV 】

そういう形のなさにじれて、聴く人は聴きながらつい言葉を継ぎ足してしまう。ただ相手の言葉を受け止めるだけでなく、「〜ということなんじゃないですか、だったら……。」と解釈してしまう。こうして話す側のほうが、生まれかけた言葉を見失ってしまう。

じっくり聴くつもりが、実際には言葉を横取りしてしまうのだ。言葉が漏れてこないことにじれて、待つことに耐えられなくなるのだ。

ホスピタリティ、D、歓待（他者を温かく迎えるということ）においては、聞き上手といったソシツの問題ではなく、どのようにして他者に身を開いているかという、聴く者の態度や生き方が、常に問われているように思う。

（出典 『まなざしの記憶』 鷺田清一 著）

\*1 シンパシー—— 同情。思いやり。共感。

\*2 宇野千代—— 小説家。（二八九七—一九九六）

\*3 ケア—— 世話。介護。手当て。

\*4 カウンセリング—— 個人的な悩みについて相談に乗り、解決できるよう援助すること。

問一 ― 線部の①～⑥のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直し、それぞれ解答欄に答えなさい。

問二 空欄 A、D に入る最も適当な言葉を次の中からそれぞれ選び、解答欄に記号で答えなさい。

【ア しかし イ だから ウ つまり エ なぜなら】

問三 空欄 X、Y に当てはまる語をそれぞれ本文中より三字で抜き出し、解答欄に答えなさい。

問四 本文には、次の一文が抜けています。元に戻すと本文中の【Ⅰ】～【Ⅳ】のどこに入れるのが最も適当ですか。

解答欄に記号で答えなさい。

【 自分にとってもまだ言葉になっていないような言葉、一つ一つその感触を確かめながらでないと言葉だ。】

問五 ― 線部①「後者の人たち」とありますが、それはどのような人たちを指していますか。最も適当なものを次の中から選び、

解答欄に記号で答えなさい。

ア どこからともなく響いてくるBGMを聴いている人たち。

イ ワープを打つ音に集中したり屋外の鳥の鳴き声を聴いている人たち。

ウ 走る電車の中で隣の人の話している内容に耳を傾けている人たち。

エ 走る電車の中で轟音を気にもせずに本を読んでいる人たち。

問六 ― 線部②「自分が出る」とありますが、どのようなところに「自分」が出るのですか。最も適当なものを次の中から選び、

解答欄に記号で答えなさい。

ア 相手の言葉をしっかり受け取れるかというところ。

イ 相手の言葉をそのまま受け取るのが難しいところ。

ウ 相手の言葉から何を選んで聴くかというところ。

エ 相手の言葉に関心があるかどうかというところ。

問七 ― 線部③「他者のセルフ・ケアをケアすること」とはどういうことですか。四十字程度で説明し、解答欄に答えなさい。

問八 ― 線部④「言葉を横取りしてしまう」と同じ意味で表現されている部分を本文中から二十字以内で抜き出し、解答欄に答えなさい。

《 下書き用 》

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

七十二歳のたつ子は果物屋を営んでいる。そのたつ子の店に最近、若い学生の常連客ができた。学生は週に二度、特売の果物を買っていくのだが、そんな学生のことをどこの生まれなのかとたつ子は想像していた。

とある夕方、たつ子さんは買い物かごをさげ、疎水<sup>\*1</sup>べりの道を歩いていました。かごにはカマス<sup>\*2</sup>の開きが入っています。初夏の夕陽が[A]水面をなめている。小さな橋の上を、ゴム製のサッカーボールが[B]転がってくる。たつ子さんは苦笑し、ボールのあとを追って、下駄<sup>げた</sup>をひきずり、アパートの自転車置き場に入っていました。

ボールはすぐに見つかりました。大きな袋に当たって止まったのです。たつ子さんはしばらくその場に立ちつくし、足もとのものを見つめていました。子どもが追いついてきて、きまり悪げに顔をうかがう。すぐにボールを拾いあげ、疎水のほうへ駆けていきます。

翌日の昼間、いつもの風体<sup>\*3</sup>でやってきた学生に、悪いけれども、あなたに果物は売れない、とたつ子さんは言いました。

「食べやしないのに。」

レイセイな口調ですが、声はわずかに震えています。

「買ってくれたものをどうしようが、お客さんの勝手だって、それはそうかもしれませんがね。でも、かわいそうですよ。まるで[X]をつけられないまま、あんなにひどく腐ちまうつてのは、果物たちにしたらね、ほんとうに無念なことだったと思いますよ。」

しばらく黙っていた学生は、苦しげに息をついて、しずかに話しはじめました。彼は画学生でした。ここしばらく、朝な夕な、果物のスケッチに取り組んできたのです。アルバイトに出かける以外、ほぼ一日部屋にこもり、絵の具にまみれて過ごしてきた。

「でも、奥さん、描いた果物は、全部食べていました。絵に写したあと、全て平らげていたのです。この果物はどれも、ほんとうにおいしかった。早く描きあげて、それを口に入れるのが、筆を動かしながら楽しみでならなかったほどです。」

四日前、画学校で合評会がありました。講師や先輩たちは、古くさい彼の絵を[Y]で笑い飛ばしました。「アみ物教室の隣で描いているような絵」と言う者もいた。その夜アルバイト先で、画学生は酔客<sup>\*4</sup>を殴りました。非は客のほうにあったのですが、間の悪いことに婦人警官が三人、奥のテーブルで愚痴<sup>ち</sup>をこぼしあっている最中だった。彼は勾留<sup>\*4</sup>され、アルバイトをくびになり、昨日ようやくアパートへもどりました。蒸し暑い部屋へ入ると、置きざらしの

果物から、煙のあがっているのが見えます。よくよく見ると、それは蠅<sup>ば</sup>の群れでした。

「ひどい光景でした。蠅は果物だけでなく、あらゆるものにたかっています。絵の具やキャンバス、鏡、ぼく自身にも。一刻も早く捨てなくちゃと思った。ぼくは、片っ端からゴミ袋に詰め、窓から投げ捨てたのです。ほんとうに申し訳ありません。自分のやったことに吐き気がします。奥さんのすばらしい果物を、あんなふう<sup>①</sup>に捨てるだなんて。」

たつ子さんはしばらく黙っていました。そして席を立つと、奥の業務用冷蔵庫から、大きなグレープフルーツを取ってきました。<sup>\*5</sup>ごどくのような爪で、  
[C]むく。これまで何千、何万個の果物を、大切に扱ってきた分厚い爪で、あつという間にむいてしまう。

「さあ、お食べなさい。」  
薄皮を割り、たつ子さんは言いました。

「食べて、腐ったものことは忘れちまいなさい。今どきのグレープフルーツは、まったく目がさめるような味がしますよ。」

画学生は頭をさげ、指を伸ばしました。一口へ入れるや、みずみずしい香氣<sup>\*6</sup>とともに、明るい霧<sup>\*6</sup>のような笑みが、顔全体にひろがっていきます。(おいしい果物を食べたなら誰もの顔がそうなる。)

画学生は翌日から、店先にイーゼルを立ててスケッチをはじめました。たつ子さんがそうするよう強く主張したのです。

「わたしは、絵のことなんてちんぷんかんぷんだけど、果物のことならわかる。」

たつ子さんは言いました。

「果物の色は外で、太陽に当てて見るのがいちばんだ。あんなじめじめした部屋の暗がりじゃあ、腐ったような色にしか見えないよ。」

「じめじめで悪かったな。」

不動産屋のじいさんが脇<sup>\*7</sup>で[Z]をとがらせ、

「そういう文句なら、大家に言ってくれ。」

盆休みに、画学生は帰省<sup>\*8</sup>することになりました。たつ子さんのにらんでいたとおり、北国の生まれでした。冬は雪にとざされ、りんごの産地としても有名な山村です。学生はほほえみながら、額<sup>\*9</sup>に入れた絵を一枚、たつ子さんにプレゼントしました。そして古びたリュックをセオ<sup>\*9</sup>い、旅だっていきました。渡された絵を胸元でちらとのぞき、たつ子さんはあぜんとなりました。数日前にしあがったというそれは、果物だけの絵ではなかったのです。

「よう、たつちゃん。俺にはわかるぜ。」



じいさんはにやにやと言います。

「そこに描いてある絵がどんなものか、俺にはだいたい見当がつく。」  
たつ子さんは、さくらんぼのような頬ほほを揺らせ、照れくさげに笑いました。そして、ゆっくり席を立つと、布に包まれた画学生の贈り物を、レジのうしろに立てかけました。

( 出典 『雪屋のロックスさん』 いしいしんじ 著 )

- \* 1 疎水そすい ——— 給水や発電などのために、土地を切り開いて設けた水路。
- \* 2 カマス ——— スズキ目カマス科の海魚。塩焼きのほか、干物としても賞味される。
- \* 3 風体ふうたい ——— なりかたち。みなり。
- \* 4 勾留こうりゅう ——— 被告人や被疑者を刑務所や留置場などに拘束すること。
- \* 5 ごとく ——— 火鉢ひばちやいろりなどの中に置いて、やかんや鉄瓶てつびんを載せる三脚または四脚の、鉄などで作られた道具。
- \* 6 イーゼル ——— 絵を描く時に、カンバスやスケッチブックなどを載せる台。
- \* 7 不動産屋のじいさん ——— たつ子の店の常連客。

問一 ——— 線部の㉓㉔㉕のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直し、それぞれ解答欄に答えなさい。

問二 空欄   に入る語句として適切なものを次の中から選び、それぞれ解答欄に記号で答えなさい。

【 ア さくさくと    イ ちろちろと    ウ てんてんと    エ ばらばらと 】

問三 空欄   に当てはまるからだの一部を指す漢字一字をそれぞれ解答欄に答えなさい。

問四 ——— 線部①「悪いけれども、あなたに果物は売れない」とありますが、それは誰のどのようなことに対して、どのような感情を抱いていたからですか。その理由を解答欄に答えなさい。

問五 ——— 線部②「そうするよう強く主張した」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。

- ア 画学生に果物を腐らせたつぐないに目の前で絵を描かせるため。
- イ 画学生の新鮮な果物を食べたときの笑顔が見たいため。
- ウ 画学生が果物の絵を描く姿を間近で観察したいと思ったため。
- エ 画学生に明るいとこで果物の美しい姿を描かせるため。

問六 ——— 線部③「にらんでいた」とありますが、「にらんでいた」とはここではどのような意味を表していますか。最も適当なものを次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。

- ア 注意すべきものとして監視・警戒していた
- イ 物事の原因や成り行きの見当をつけていた
- ウ 鋭い目つきでじろりと見つめていた
- エ あらかじめ先々の予定をたてていた

問七 ——— 線部④「たつ子さんはあぜんとなりました」とありますが、なぜ「あぜんと」したのですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。

- ア 果物だけでなく自分の姿も描かれていたから。
- イ 果物と一緒にお店の様子も描かれていたから。
- ウ 自分と不動産屋のじいさんの笑顔が描かれていたから。
- エ 果物の絵だけでなく複数の絵をプレゼントしてくれたから。

【三】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

筑紫に、<sup>\*1</sup>なにがしの押領使など <sup>\*2</sup>いふやうなる者のありけるが、<sup>\*3</sup>土大根をよろづにいみじき薬とて、朝ごとに二つづつ焼きて食ひけること、年久しくなりぬ。  
〈長年に〉

ある時、館の内に人もなかりける隙をはかりて、敵襲ひ来たりて囲み攻めけるに、館の内に兵二人出でて来て、命を惜しまず戦ひて、みな追ひ返してげり。<sup>②</sup>いと不思議におぼえて、「日ごろここにももし給ふとも見ぬ人々の、かく戦ひし給ふは、いかなる人ぞ。」と問ひければ、<sup>③</sup>「年ごろ頼みて、朝な朝な召しつる土大根らに <sup>④</sup>さうらふ。」と言ひて、<sup>⑤</sup>失せにけり。<sup>⑥</sup>深く信を致しぬれば、<sup>⑦</sup>かかる徳もありけるにこそ。

（出典 『徒然草』）

〈すきを見計らつて〉

〈思つたので〉

〈いらつしやるとも見えない方々〉

〈このように〉

〈どういふお方なですか〉

〈長年信頼して〉

〈毎朝毎朝〉

〈こざいます〉

〈姿を消してしまった〉

\*1 筑紫——ここでは、今の九州地方。

\*2 なにがし——どこそこ。人名などをぼかしている場合に用いる。

\*3 押領使——暴徒や盗賊などを取り締まった地方官。

\*4 土大根——大根の古名。

問一——線部①・④を現代かなづかいに直し、ひらがなで解答欄に答えなさい。

問二——線部②「いと不思議におぼえて」とは、どのようなことを不思議に思つたのですか。その内容として最も適当なものを次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。

ア 全く身に覚えがないのにいきなり敵が現れ襲ってきたこと。  
イ 命を惜しまず敵を追い返した兵士が大根の化身であったこと。  
ウ いつも館を守っている兵士たちが全く死を恐れていないこと。  
エ 敵が襲ってきたときに、二人の兵士が戦ってくれたこと。

問三——線部③「問ひ」と⑤「失せ」のそれぞれの主語を次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。

【ア 兵二人 イなにがしの押領使 ウ敵 エ作者】

問四——線部⑥「深く信を致し」とありますが、何を信じてどのような行動をとつたことを指しますか。その内容を三十字程度で説明し、解答欄に答えなさい。

問五——線部⑦「かかる徳」の「徳」とはここでは何を指していますか。最も適当なものを次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。

【ア 人徳 イ品格 ウ功德 エ能力】

問六 本文の出典である『徒然草』は鎌倉時代の作品です。これと同時代の文学作品を次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。

【ア 源氏物語 イ奥の細道 ウ方丈記 エ竹取物語】



令和5年度 国語 解答用紙

受験番号
氏名

【一】

問一

① シンドウ	② 澄まして
③ 織細	④ 貫いて
⑤	⑥ キソ
⑦	⑧ ソシツ

問二

A	B	C	D
---	---	---	---

問三

X	Y
---	---

問四

--

問五

--

問六

--

問七

--	--	--

問八

--

【二】

問一

① レイセイ	② アみ
③ 帰省	④ 額
⑤	⑥ 霧
⑦	⑧ セオい

問二

A	B	C
---	---	---

問三

X	Y	Z
---	---	---

問四

--

問五

--

問六

--

問七

--

【三】

問一

①	②
③	④

問二

--

問三

③	④
⑤	⑥

問四

--	--

問五

--

問六

--

30

20

20

40

20